上本部村備瀬貝塚調査概要

高　宮　広　衛

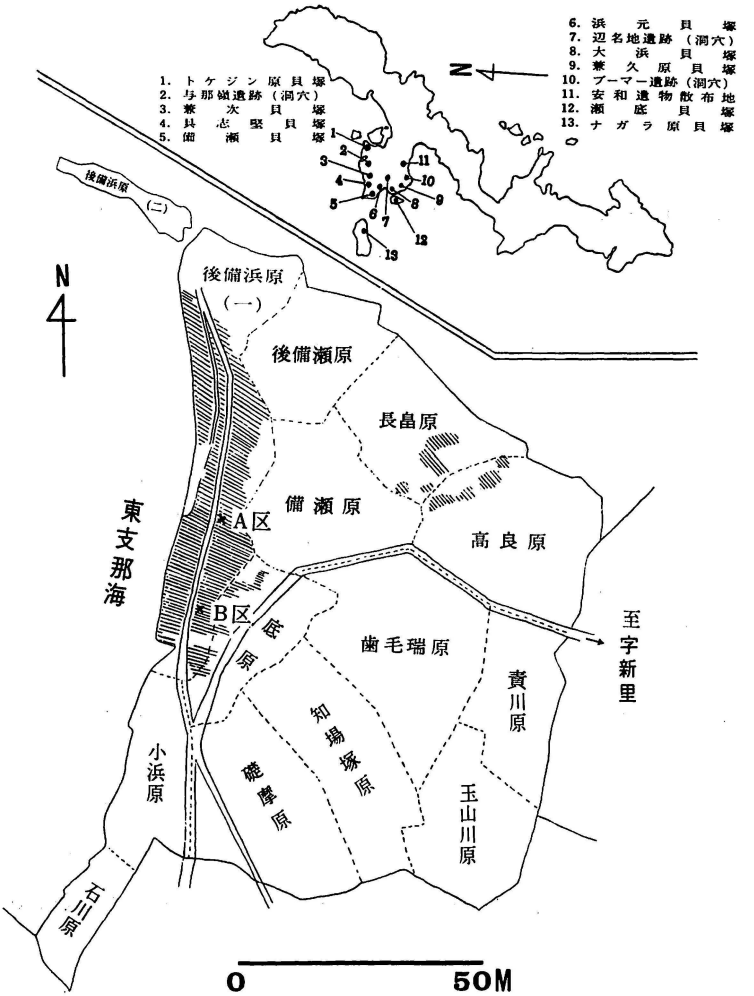
(一)

沖縄本島の中央部からやや北の方（北緯26°45'）で東支那海に突出する半島を本部半島という。この半島には上本部村、今帰仁村、羽地村（1部）、本部町、屋部村、名護町（1部）の6つの行政区があるが、今回調査を行った備瀬（上本部村）は半島の西北端部に位置し、一衣帯水を隔てて西方には伊江島が指呼の間に見え、晴天には北方洋上に伊是名、伊平屋の両島を望みうる半島尖端部の砂丘上に立地している。

同半島では現在までに11の先史遺跡①が確認されている（第1図上）。隣接する瀬底、古宇利、屋我地の3島を含めると17の遺跡②を数えることができる。この数は北部地方では比較的多い方に属する。しかしながら、同半島における過去の考古学的調査は決して充分とはいえず、今日なお寥々たる状況を呈している。地形的見地からすれば、本部半島は北部地方における遺跡分布の最も有望な地域である。今後、組織的な調査を実施すれば遺跡数の増加は勿論、各種遺跡の発見が可能と思われる。

われわれは、1966年冬、本部半島尖端部の調査を行い、備瀬貝塚の存在（第1図）を知り、また、上本部村の石川、山川の2洞穴ではそれぞれ石斧1個と同一器体に属する土器片10数個を得た。以下、調査の概要を報告したいと思う。

なお、発掘を行うに当り、区長仲村吉氏や地主の仲宗根カナさんおよび高良善雄氏には大変お世話になった。また、本文中の石質は秋田大学教授嘉納博博士に、貝殻は沖縄大学助教授大嶺哲雄氏に同定していただき、図



第1図　備瀬貝塚附近略図（×は試掘地，斜線は集落）

表は琉球大学々生当真嗣一、安里嗣淳、高安利雄の３君に分担していただいた。記して厚く謝意を表する次第である。

（二）

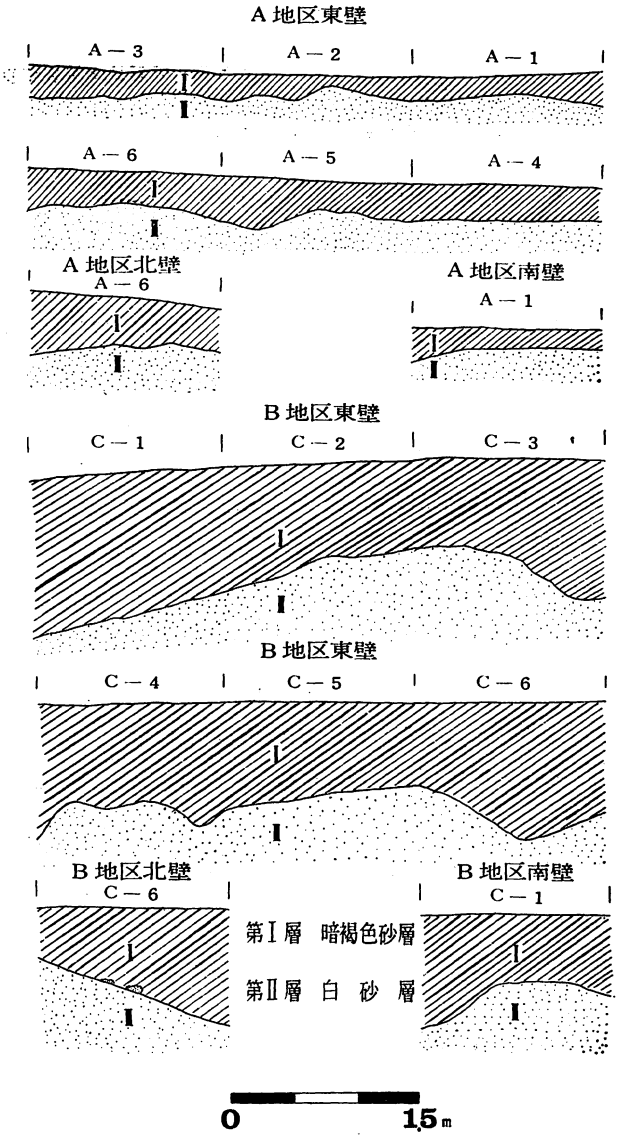
調査は1966年12月28日から翌年１月３日までの７日間にわたって実施した。本貝塚は備瀬の集落内にあって東西30〜50m、南北約150mの大規模なもので、長軸は海岸線に沿って南北の方向に延びている。集落は砂丘上にあり、標高は３〜５mである。集落と砂丘の東端はほぼ一致し、そこでは、いわゆる琉球石灰岩地帯からのマーヂ土と接するが、遺物は砂丘地に集中し、マーヂ地帯では僅少であった。遺物は北は仲村蒲助氏宅（578番地）附近から南は公民館（457番地）あたりまで散布しているが、貝塚自体が集落内に包含されているため、宅地造成、耕作等によって大部分は破壊され、オリヂナルな遺物層の残存は期待できなかった。表採時の状況によると仲宗根カナさん宅(528番地）周辺で遺物は最も豊富であったから、第１次試掘を仲宗根さんの宅地内で行ったが、遺物層は徹底的に攪乱されていて層位上の適切な資料を得ることはできなかった。遺物の散布状況から見て、公民館北隣りの屋敷(466番地）も発掘の余地が残っているように思えたが、許可が得られなかった。結果として、高良善雄氏の宅地(467番地、公民館東隣り）を発掘することとなったが、遺跡の保存状態は仲宗根カナさん宅より悪るかった。以下、仲宗根さん宅をA区、高良さん宅をB区として概要を記す。

（三）

1）A区

周囲の状況からして、若し遺物層が幾らかでも残存しているとすれば、

第2図　備瀬貝塚（A・B地区）のトレンチ側壁図



第2図　備瀬貝塚（A・B地区）のトレンチ側壁図

それは仲宗根さん宅の東縁部一帯と考えられた。そこは現在甘蔗畑になっている。この甘蔗畑の東端部で南北の方向に1.5×９mのトレンチを設け、これを1.5m四方の６ピットに区分し、２乃至３人で１ピットを担当した。層序は暗褐色砂層（第Ⅰ層）と白砂層（第Ⅱ層）の２層（第２図上）が認められた。遺物は主として第Ⅰ層で得られたが、層は薄く、トレンチの南壁で15～20㎝.、北壁で30～40㎝.、平均30㎝の厚さを示していた。貝殻の埋蔵量は極めて少く、耕作時にかなり取除かれたようで、周囲の生垣に沿って相当量見受けられた。基盤の白砂層上部では若干遺物の陥入が見られたが、10㎝以下にはおよんでいなかった。白砂層の遺物には土器片の他、磁器片、魚獣骨等（第１表）がある。調査の最終日、ピットA―１において白砂層を1.20m掘下げたが、第２の遺物層は見当らなかった。

食料残滓としては魚獣骨と貝殻がある。獣骨は主として猪骨で牙も１個（第６図３）第Ⅰ層で得られたが、人為的加工は認められなかった。遺物層の保存状態が既述のように最悪のケースであったから、コンティタティヴ・サンプルとしての貝殻の収集は断念した。貝殻の種類はB地区出土の範囲を出ないから、B地区の部でまとめた。

陶磁破片は発掘によって75個（第１表）得られた。すべて現代の製品であるから、本文では省略する。

石器はすべて表採によるもので発掘による発見はなかった。大部分は仲宗根氏宅周辺、他は仲村蒲助氏宅地内での採集で、石器の種類および石質を第２表に示した。

第３図５は光沢を有するほど研磨が行届いているが、他は粗雑で当初の打欠痕は消え切っていない。同図１～５は凹石で、１は両面および上下の側面にも凹みが認められる。３は１面のみに施され、４・５は背面欠損のため凹みの有無は不明である。同図６には凹みが認められないから磨石と

遺物＼ピット・層			A−1		A−2		A−3		A−4		A−5		A−6		合計
			第Ⅰ層	第Ⅱ層	第Ⅰ層	第Ⅱ層	第Ⅰ層	第Ⅱ層	第Ⅰ層	第Ⅱ層	第Ⅰ層	第Ⅱ層	第Ⅰ層	第Ⅱ層	
人工遺物	土器	口縁			2		2	2	5	5	3		4		23
		底部							2		2				4
		胴部	55		55		96	2	90	18	122	6	80		524
	石器														
	貝器		1												1
	骨器														0
	磁器		4		2		8	1	4		1		1		21
	陶器		1		7		1		19		17		9		54
	カワラ片				6		6						2		14
	鉄片		1				1				2		2		6
	硯片										1				1
	ガラス片										1				1
自然遺物	魚骨						2		2	15	13	5	5		42
	獣骨		1		1		6	2	5	6	18	1	3		43
	貝殻		13		33		44	2	27		28		24		171
	石材		4										1		5
合計			80	0	108	0	166	12	154	45	211	12	133	0	910

第1表　備瀬貝塚A区出土遺物集計表

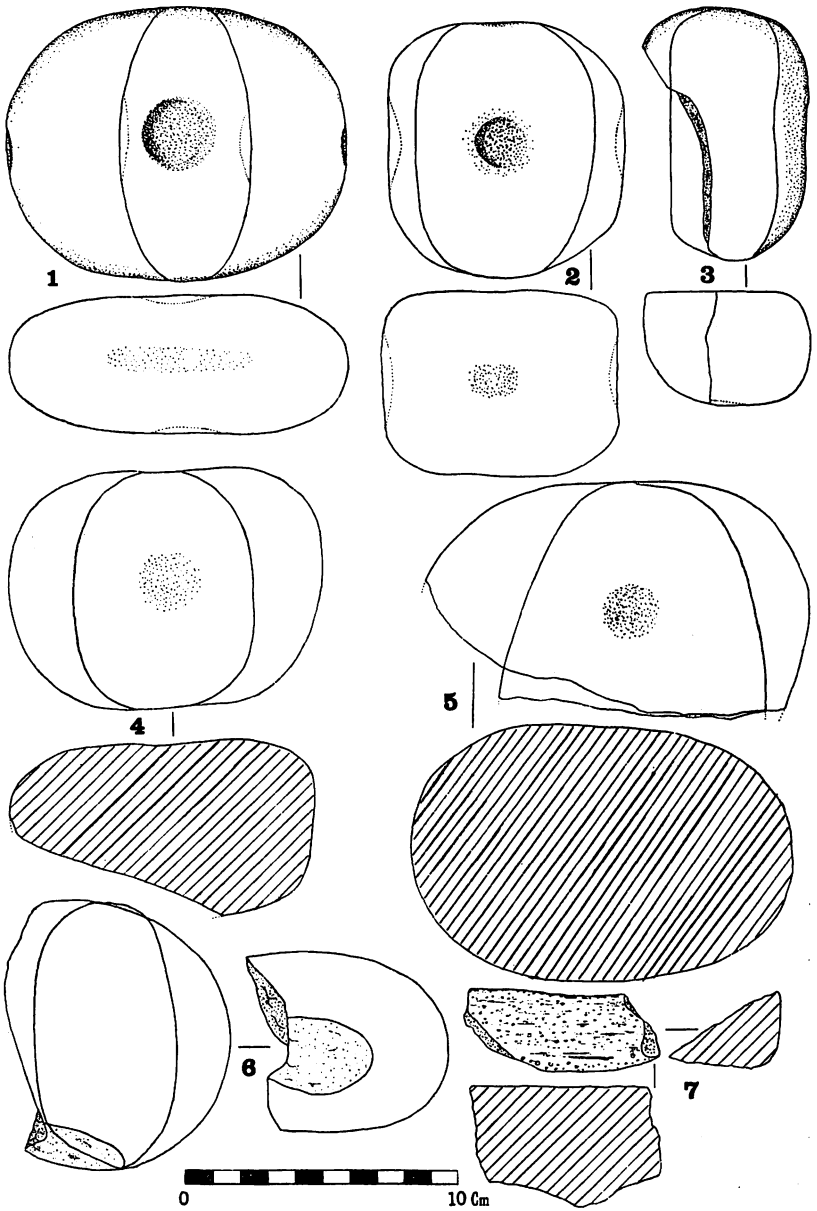
図の番号	種類	石質	層序	長さ cm	幅 cm	厚さ cm	重量 kg
3図1	凹石	アルコース砂岩	表採	12.4	10.1	5.2	1.15
〃 2	凹石	アルコース砂岩	〃	8.9	9.5	6.7	1.10
〃 3	凹石	アルコース砂岩	〃	9.2	6.4	4.2	0.35
〃 4	凹石	アルコース砂岩	〃	11.5	8.9	6.5	0.9
〃 5	凹石	玢岩	〃	14.2	—	9.3	1.7
〃 6	磨石	アルコース砂岩	〃	—	9,8	6.4	0.7
〃 7	不明	輝石安山岩	〃	—	—	—	0.08
6図1	叩石	アルコース砂岩	I	9.7	7.6	5.6	0.65
6図2	石斧	角閃石絹雲母片岩	表採	10.2	4.9	2.0	0.20

第2表　A区・B区および山川洞穴発見の石器

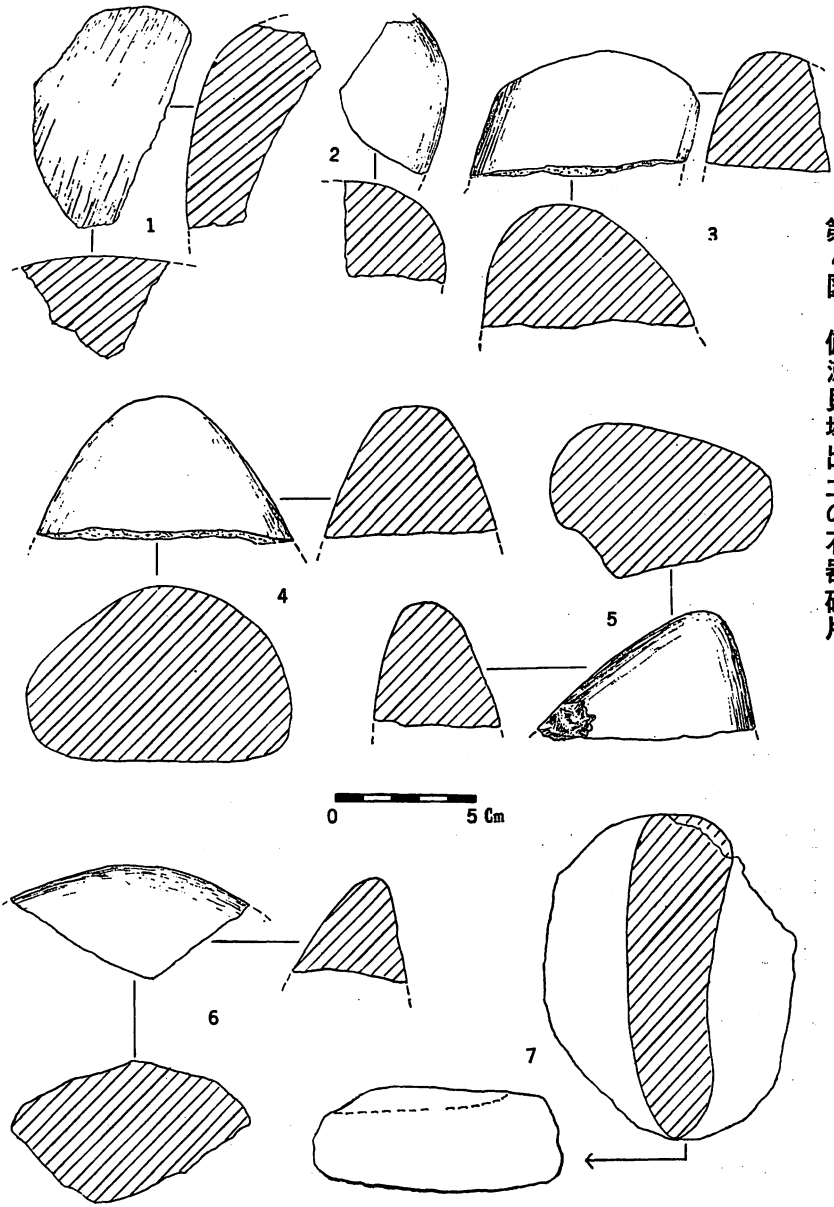
して分類した。同図7は側面の1部が残っているが、破損が著しく原形は窺えない。

以上の他に破損の著しいものを第4図1～7にまとめた。同図7は軽石、他はすべてアルコース砂岩で、7は砥石と見られる。他は残存部から見て磨石、凹石の破片かと思われる。

貝器は9個の発見があった。メンガイ製装身具（第6図10）以外はすべて表採によるものである。同図4～6はクモガイの体層部を利用したもので、長さは7～8cm、幅は4～5cmである。湾曲の状態から見て匙の用途が考えられるから小型貝匙（ヤコウ貝製と区別するために）の名称で呼ぶ。8はシヤコ貝の錘で孔は2×3cm、腹縁部は破損している。9はリュウキュウサルボウ製の錘で孔は1.5×2.8cm、輪脈はかなり磨滅している。10はメンガイを利用した垂飾で1部破損、12はシャコ貝製貝皿、7はアンボンクロザメの螺塔部を両側から削取って円板状に整形したもので、径4mmの孔を一方から穿ち、他面は自然の凹みを利用している。11はいもがい科の螺塔部であるが種は不明、体層部除去後の上端部を不規則に研磨す



第3図　備瀬貝塚の石器



第4図　備瀬貝塚出土の石器破片

る（第Ⅱ図版A）。

土器は表採によって数10個、発掘によって551個の破片を得た。遺物層が常時攪乱を受けている耕作地内に存するためか、破片は極めて小さく、接合して完形を示せるようなものはなかった。今回採集せる破片のうち主なものを第５図に示した。器形は鉢形、壺形、甕形の３種が認められる。

A）鉢形土器

第５図４に示した１片だけであるが、比較的大きな破片で、口縁部は内湾し、口唇部は尖っている。器面は暗褐色、胎土中央部は黒色、器壁は現存部の最も厚い箇所で９㎜を測る。胎土には石英や長石の砕片が少量含まれ、他に赤褐色の物質も見受けられる。器面調整は悪るく、繊維状の物質を押圧したような不規則な短沈線群が見受けられる。口径約11.3㎝、焼成は良好である。第Ⅰ層最下部（白砂層に接する箇所）の出土。

B）壺形土器

同図15の１個で肩が張っている。器面は暗褐色、胎土中央部は黒色、口径は約11㎝、胎土には少量の砂粒を混入する。焼成は極めて良好。器面調整は前記の鉢型土器より良く、また同様の沈線群も若干認められる。第Ⅰ層の出土である（図版Ⅰの14）。

C）甕形土器

a）有文土器

1.同図６は口縁部の破片で器面には山形文の１部かと考えられる細線文が施されている。器面は茶褐色、胎土中央部は黒色、器面調整・焼成ともに極めて良い。口唇部は丸味を帯びている。破片が小さいため口

径は推算し得ない。第Ⅰ層の出土である。

2.同図7は口縁に沿って1条の沈線をめぐらし、口唇部にも同工具による文様を施文する。黄褐色の破片で胎土には少量の砂粒を混入する。擦痕は認められない。他の土器に比し幾分脆弱である。口径は不明。第Ⅰ層の出土である。

3.同図9は口縁が著しく外反している。器面は褐色、胎土中央部は黒色、頸部には横走の直線を上に返すような文様を連続させる。胎土には砂粒の他赤褐色の物質が僅かながら含まれている。焼成は普通、器面調整は良好。擦痕は施されていない。表採品。

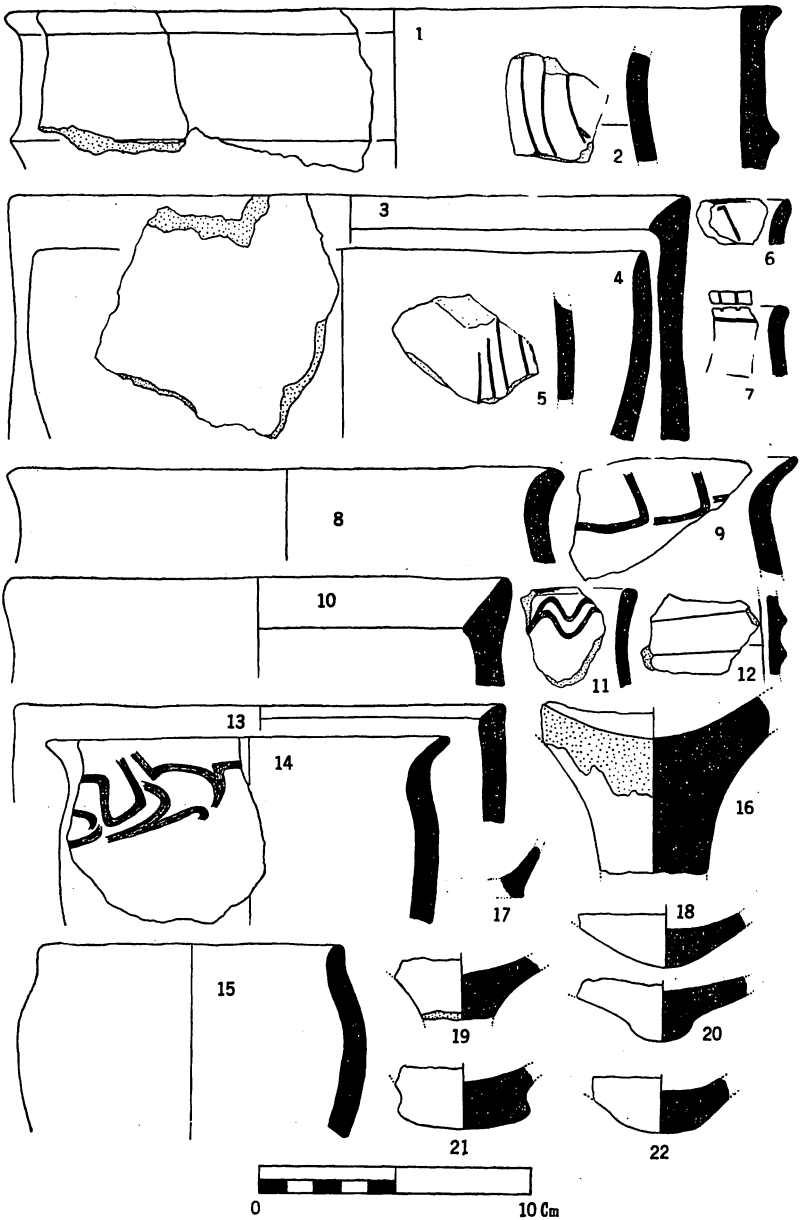
4.同図11は曲線の山形文を2条施し、部分的に連結させている。裏面にも同種の文様を施文する。胎土には砂粒を混入する。焼成は普通。器面調整は良好で、擦痕は施されていない。色調は器面も胎土中央部も褐色、表採品。

5.同図14（図版Ⅰの5）の口縁部も著しく外反を示し、頸部から胴上部にかけて図のような複雑な曲線文を施す。器面は黄褐色、胎土中央部は黒色、胎土には少量の砂粒および赤褐色の物質も認められる。焼成、器面調整ともに一応は良好といえる。小型の甕形土器で口径は推算15㎝。表採品。

6.同図2は頸部の破片で沈線を縦に施す。あかるい褐色の厚手（10㎜）の破片で焼成は極めて良い。胎土には角閃石の微粒子を多量混入する。擦痕は認められない。第Ⅰ層の出土。

7.同図5は胴部の破片で文様の1部を残す。器面は黄褐色、胎土中央部は黒色を呈す。焼成は極めて良く堅緻である。胎土には角閃石、石英の微粒子が含まれている。擦痕は施されていない。厚さは7㎜。表採品。

b）口縁部の断面が内側で三角形の肥厚を示すもの（図版Ⅰの2・6）



第5図　備瀬貝塚（A地区）出土々器実測図

1.同図３は比較的大型の破片であるが、残念ながら口縁部上端はかなり欠損している。器面は褐色、胎土中央部は黒色を呈す。焼成、器面調整ともに一応は良好である。胎土には大粒の石英片（多量）の他、少量の絹雲母片岩、砂岩片岩の砕片が混入されている。器壁は厚手（１㎝前後）に属する。この口縁は宇座浜式土器の口縁形状とは逆で、断面は内面で三角形をつくる。表採品である。

2.同図10はあかるい褐色の土器で胎土中央部は幾分黒ずんでいる。同図２と同じく断面は内部で三角形を呈す。混入物は同図２と同じである。器面調整は良好だが全体的に幾分脆弱である。これも表採品である。

c）凸帯を貼付するもの

1.同図１（図版Ⅰの３）の直口の甕形土器で、表面は黒色、内面は部分的に褐色で全体的には黒色を呈している。混入物は同図2･8と同じで、器面でもかなり見受けられる。焼成は極めて良く、本貝塚採集品中最も堅緻である。口唇部は図のように平坦になり、口唇下約５㎝の箇所に１条の凸帯が水平方向に付されている。凸帯は極めて精功で断面は均斉のとれた三角形を呈す。しかし、現破片では凸帯が何条貼付されていたか窺知できない。第Ⅱ層（白砂層）上部の出土である。

2.同図12（図版Ⅰの11）はかなり破損しているが２条の凸帯が認められる。器面は黄色、胎土中央部は黒色、裏面は欠損のため残っていない。凸帯の断面は三角形で規格的である。胎土の混入物は石英（多量）、角閃石（中量）、長石（少量）である。小破片のため凸帯が２条しか残ってないが、類例品によって見ると３条貼付されていたかと思う。表採品。

d）無文の甕形土器

1.同図８は比較的厚手の口縁破片で緩かな外反を示し、口唇部は丸味を帯びている。器の外面は茶褐色、胎土中央部から内面へかけては黒色。多量の砂粒と少量の石英、長石類が含まれている。擦痕は施されていない。焼成、器面調整ともに良好である。表採品。

2.同図13も表採による直口の甕形口縁破片で、口唇部は内側へ傾斜している。器色は茶褐色、胎土中央部は黒色。少量の砂粒、石英、長石類を混入する。焼成、器面調整とも良好。擦痕は認められない。

土器の底部は６個得られた。同図16はかなり破損しているが、あかるい褐色を有し大粒の石英角礫(多量)、少量の絹雲母片岩、砂岩片岩を混入する。今回採集せる土器資料中最も脆弱で、器面調整も悪るく不規則な凹凸を呈している。第Ⅰ層底部の出土。同図17は唯一の平底破片であるが、破損が夥しく底径は推算し得ない。角閃石の微粒子を含む堅緻な土器で色調は茶褐色，表採品である。同図18は大破した尖底破片を図上復元したもので、焼成は極めて良好。砂粒を混入するが稀に見受けられる程度である。器色は器面、胎土中央部ともに褐色。器面調整は普通，第Ⅰ層の出土。同図19は同図16と同じ形状の底部破片と見られるが、下端部欠損のため厚さは不明である。器色はあかるい褐色に属し、石英、長石等を少量混入する。焼成、器面調整ともに普通以下で、同図16に酷似した状況を示している。表採品である。同図20は乳房状の尖底で第Ⅰ層の出土である。器の外面は黄褐色、内面、胎土中央部は黒色。石英が少量(稀)含まれている。焼成は中程度。器面調整は普通。同図21は丸底に近い平底で厚さは1.8㎝、器色は茶褐色、焼成は中程度、胎土には石英、長石が少量混入されている。器面調整も普通，表採品。同図22も表採品で厚さは1.5㎝、器色は胎

土中央部もともに茶褐色、混入物は見当らない。焼成、器面調整は普通。

土器の胴部破片を見てみると、厚さは５～６㎜で、器色は茶褐色のものが最も多く、その他に黄褐色や暗褐色、赤褐色を呈するものが僅かながら見られる。擦痕は施されてなく、類例遺跡の土器に比べると焼成も器面調整も余り良好とはいえない。混入物としては石英が最も多く、絹雲母片岩、角閃石、砂岩片岩が少量認められるが、いずれも角礫のようである。円礫としては砂粒が少量混入されている程度である。

Ⅱ）B区

高良善雄氏宅の西端部（道を隔てた西隣りは公民館）にA・Cの２トレンチを設けた。Aトレンチを宅地の西端に沿って、Cトレンチを1.5m内側で設定したが、Aトレンチは西端部の状況を見るためであったから、1.5m四方の２ピットに留めた。両トレンチにおいて暗褐色砂層（第Ⅰ層）と白砂層（第Ⅱ層）の２層が認められたが（第２図下）、遺物を包含する第Ⅰ層はA区よりも攪乱を受けていて、発掘容積に比し遺物の量は僅少であった。

食料残滓としては魚獣骨と貝殻が得られたが、前者は未同定であるから別に報告の機会をもちたいと思う。貝殻は下記の70種が検出されたが、陸産の５種は量的に極めて少く、食料に供せられたとは考え難い。その他タコノマクラ（棘皮動物）２個、コウイカの甲ら破片２個が検出されている。貝類の同定については吉良哲明著原色日本貝類図鑑（保育社昭34）に従った。

A）陸産

1. オキナワヤマタニシ
2. アオミオカタニシ
3. パンダナマイマイ
4. クンチャンマイマイ

5. オキナワウスカワマイマイ

B）海産

a）巻貝

いもがい科

6. クロミナシ
7. ソウジョウイモ
8. タガヤサンミナシ
9. ツヤイモ
10. アンボンクロザメ
11. マダライモ
12. ヤナギシボリイモ
13. ハイイロミナシ
14. サヤガタイモ
15. コマダライモ

たからがい科

16. ハナマルユキ
17. キイロダカラ
18. ヤクジマダカラ
19. ハナビラダカラ
20. オミナエシダカラ
21. ホシダカラ
22. ヒロクチダカラ

むしろがい科

23. アラムシロ
24. ムシロガイ
25. サメムシロ
26. クリイイロヨウバイ
27. イボヨウバイ

にしきうず科

28. サラサバテイ

	29. ニシキウズ
	30. ムラサキウズ
りゅうてん科	31. チョウセンサザエ
	32. ヤコウガイ
ゆきのかさ科	33. ウノアシ
いとまきぼら科	34. イトマキボラ
	35. チトセボラ
おにこぶし科	36. オニコブシ
	37. オオオニコブシ
	38. コオニコブシ
すいしようがい科	39. マガキガイ
	40. クモガイ
	41. オハグロガイ
	42. スイショウガイ
あまおぶね科	43. アマオブネ
	44. キバアマガイ
	45. マルアマオブネ
たけのこかにもり科	46. オニノツノガイ
	47. カニモリガイ
ふじつがい科	48. ホラガイ
あつきがい科	49. ガンゼキボラ
ふでがい科	50. キバフデ
えぞがい科	51. ノシガイ
うみにな科	52. カワアイ

b）二枚貝

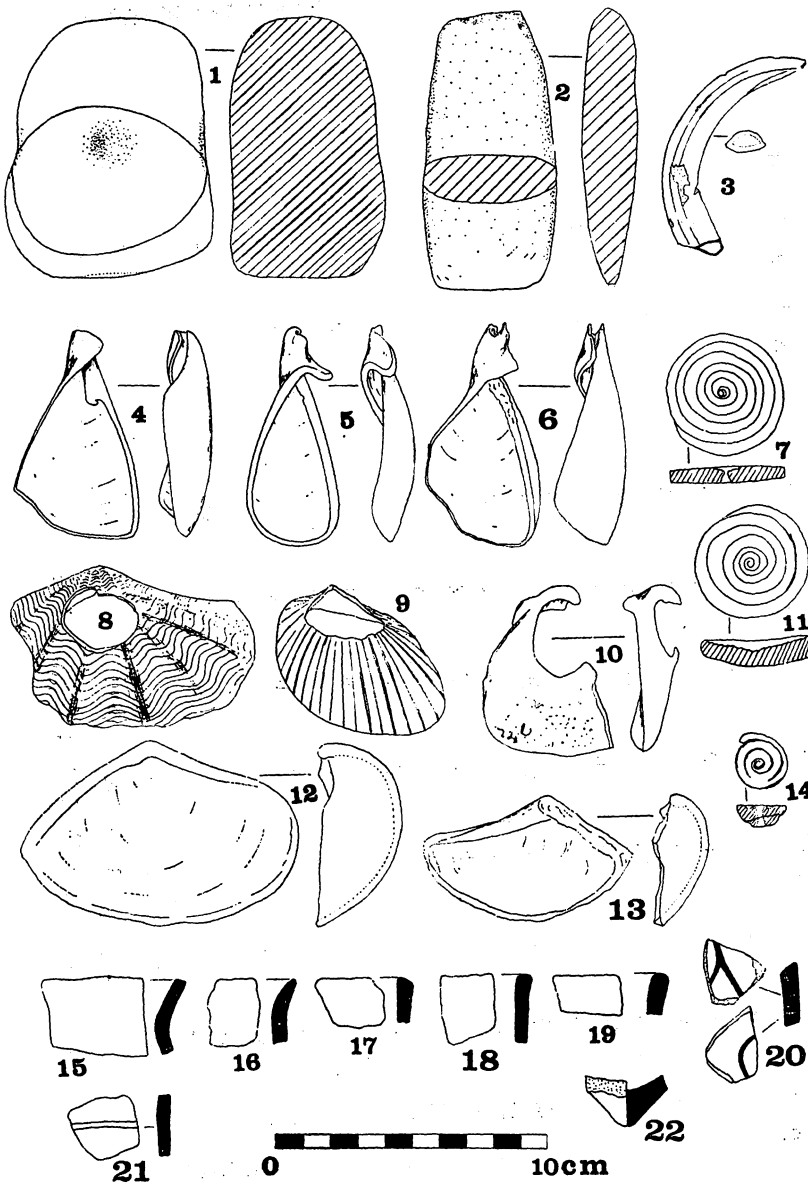
しゃこがい科	53. シラナミ
	54. シャゴウ
	55. ヒレジャコ
まるすだれがい科	56. アラスジケマンガイ
	57. スダレハマグリ
	58. アラヌノメ
	59. ユウカゲハマグリ
	60. マルスダレガイ
	61. ヌノメガイ
ふねがい科	62. リュウキュウサルボウ
	63. エガイ
いがい科	64. リュウキュウヒバリガイ
	65. ケガイ
	66. ヒバリガイ
にっこうがい科	67. サメザラ
	68. リュウキュウシラトリ
うぐいすがい科	69. アコヤガイ
りゅうきゅう ますおがい科	70. リュウキュウマスオ

発掘によって得た石器（第６図１）は叩石１個だけで、大きさ、石質等第２表の通りである。上下両面には浅い凹みが認められるから凹石としても使用されたであろう。出土地点はＣトレンチの第Ⅰ層45〜60㎝のレベルである。

貝器は32個得られた。第６図13はシャコ貝を用いた貝皿で、腹縁部は研

遺物＼ピット			C—1	C—2	C—3	C—4	C—5	C—6	C—7	A—5	A—6	合計
人工遺物	土器	口縁	6	1	3	2	1	2	0	1	1	17
		底部	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
		有文	2	18	1	1	0	0	0	0	0	22
		胴部	70	55	26	53	42	46	6	11	17	326
	石器		0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
	貝器		6	4	2	1	2	9	4	2	2	32
	陶器		78	78	64	66	53	88	21	9	22	479
	磁器		12	18	7	31	6	16	2	1	1	94
	カワラ片		15	5	2	0	4	3	2	2	17	50
	鉄片		3	1	0	3	4	2	3	2	3	21
	鉄釘		5	4	0	34	51	18	3	0	9	124
	ガラス片		2	3	0	0	0	2	0	0	2	9
	ボタン		1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	古銭		0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
○自然遺物	魚骨		14	2	0	3	15	35	0	1	0	70
	獣骨		16	1	1	7	26	59	2	4	5	121
	石材		0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
	貝殻		144	94	60	208	83	25	53	15	3	685
合計			377	286	164	409	287	306	96	49	80	2051

第3表　備瀬貝塚B地区出土遺物集計表



第6図　備瀬貝塚（A・B地区）出土々器・石器・貝器実測図

磨が施されてなく打欠のまま放置されている。未完成のものであろう。同図14はいもがい科の螺塔部を使用したもので径3㎜の孔が両面から穿たれている。2個の発見である。磨滅が甚しいため種は不明。他は小型のたからがいの体層を除去したもので、ハナマルユキ25個、ハナビラダカラ4個、打欠部は磨かれていない。綱の錘と考えられる。

土器は破片が366個得られた。主なものを第6図下段に示したが、器形の点でも文様の上でもA区より種類は少ない。このような差異は時代差というよりもむしろ攪乱の度合によって生じたものと考えられる。同図15〜19は甕形土器の口縁部と見られるが、直口のものと外反するものの2種が認められる。胴部に文様を施したものは2個で、同図21は内面にも施文する。胴部の特徴や混入物、焼成、器面調整等A区と異ならないから記述を省略する。

なお、陶磁器の破片が573個（第3表）得られたが、すべて現代のものなのでA区同様本文では省略する。

（四）

調査の最終日、同村の山川、石川両地区の踏査を行った。豊川小学校の東南約100mのところには、いわゆる琉球石灰岩の小洞穴があって、この洞穴で石斧（第6図2）1個を表採で得たが、遺物層は確認できなかった。この石斧は半磨製といっても打製に近く、刃部を除けば研磨が甚だ不徹底で、一見局部磨製の観を呈している。特徴は第2表に記した。

石川の洞穴では、入口より20〜30m奥の方で土器破片10数個を得た。1個体に属するもので、床面の岩盤に散乱していて部厚く石灰分で被われ、採取にいささか時間を要したが、無事取出すことができた。胴の張った比較的安定度の強い丸底の土器（第3図版1）で、高さ約20㎝、胴の最大幅

23cm前後、球状を呈している。口径は不規則で大体12～14cm、底部が最も厚く1.5cm、胴部は８～10mm、口縁部の方へ厚さを減ずる。焼成は一応良好である。器色は暗褐色、胎土には多量の石灰岩片が混入され器面でもかなり見られるが、器面調整が良いため器面は平滑である。したがって、城跡で得られる土器に近似する特徴を有するが、この種の器形は城跡の土器には見られないから、歴史時代もかなり後世のものかと思料せられる。

（五）

本貝塚が砂丘上に立地し、大規模であるという点では他の後期貝塚通有の特徴を示している。ただ残念なことには貝塚自体が著しく攪乱を受けていて、層位的な資料を得るという点では失敗に終ったが、表採によって数個の貴重な土器資料を得たことは幸いであった。

第５図３・10の口縁は断面が内側で三角形をつくっている。宇座浜式土器の口縁形状の逆を採用したもので、この形式の出土はこの２片をもって嚆矢とするが、果して一般化された形で本貝塚に存在したかは残念ながら不明である。底部破片のうち同図16・19の厚底も沖縄では稀で、下端部欠損のため原形を把握できないのは遺憾だが、現在知られている沖縄のいわゆる厚底とは著しく形状を異にしている。胎土、焼成技術、混入物等から判断して移入土器でないことは確かである。

同図12（図版Ⅰの11）は規格的に整形された凸帯を２条残す胴部破片で、裏面も著しく破損しているが、色調といい、焼成といい、あるいは凸帯の精巧さといい、移入土器であることは一目瞭然で、いわゆる須玖式と称されるものである。この種の土器片は筆者が伊江島のナガラ原貝塚で１個③、琉球大学助教授友寄英一郎氏が同貝塚で数個発見④され、さらに琉球大学史学科４年次の安里嗣淳君が伊平屋島の久里原貝塚で１個（第１図版

7）表採で得ている。⑤伊平屋島採集のものは赤褐色の器色を有し、少量の石英、長石の他、多量の金雲母を混入する厚手（10〜13mm）の胴部破片で、凸帯が３条付されているが、凸帯の構成、配列および焼成は伊江島例に劣る。この１例はその特徴から見て、移入土器を模した現地焼造のものだと考えられる。同図１の甕形口縁も口縁の形状や凸帯が規格的で、焼成も極めて良く、沖縄で得られる通常の凸帯文土器とは趣を異にしている。したがって、これも移入土器かと考えている。

上記須玖系土器の出土によって、大雑巴にではあるが、後期に位置付けられている本貝塚の年代が九州の弥生式土器との関係において掌握できたのは幸いであった。須玖系統の土器を出土した貝塚が現在少くとも２遺跡認められ、須玖式類似の伊平屋例を合わせると３遺跡を数えることができる。これら諸貝塚における弥生式土器の出土に加えて、種子島広田の埋葬遺跡⑥で多量得られた貝符の発見例⑦も、徐々にではあるが増加しつつあり、九州地方の弥生中期との交渉も疑えないものとなった。

註 1 } 多和田真淳氏の遺跡分布図（1966年１月作成）による。
2 }

3　筆者は1964年夏、伊江島および伊是名島の調査を行い、ナガラ原貝塚（伊江島）で本土器の胴部破片１個を得た。これについてはいずれ両島の調査報告書にまとめるつもりである。

4　琉球大学助教授友寄英一郎氏が発堀によって数個検出され、現在執筆中であるが、これらの土器を乙益重隆・河口貞徳両氏に見ていただいたところ、須玖系の土器に間違いないとの御教示を得た。

5　琉球大学歴史研究会考古学班のメンバーが1965年夏、伊平屋島の調査を行った時採取したもので、胎土、焼成、混入物等から見て須玖式土器を模し

たものと思われる。

6　国分直一・盛園尚孝「種子ケ島南種子町広田の埋葬遺跡調査概報」考古学雑誌　第43巻第3号　昭32(33)

7　恩納村熱田貝塚（整理中）、伊江島ナガラ原貝塚（整理中）、具志川城跡（整理中）でおのおの1例検出されている。

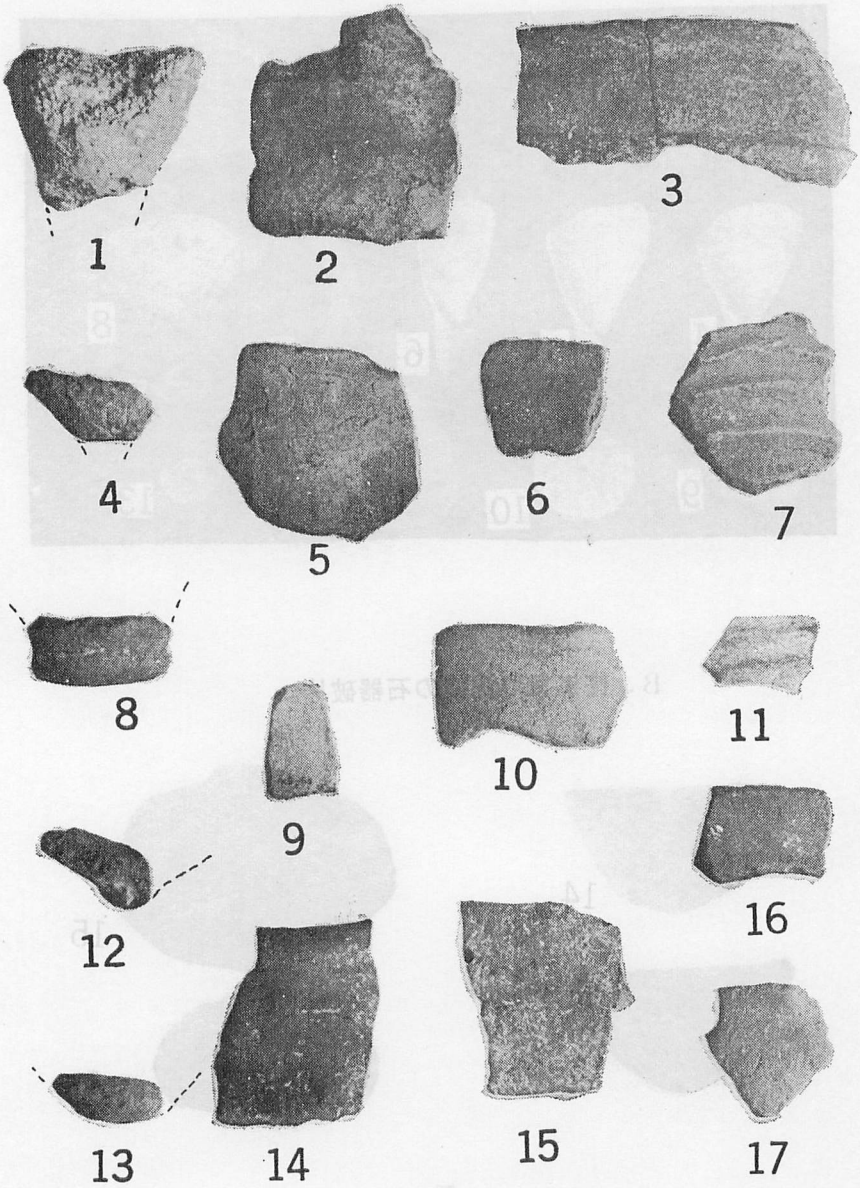
追　記

1　1966学年度後期、琉球大学史学科において考古学の講議を担当したが、その一環として今回の調査を行った。当初は伊平屋島の島尻貝塚を予定していたが、低気圧のため定期便が数日欠航、止むなく本部半島の調査に変更した。

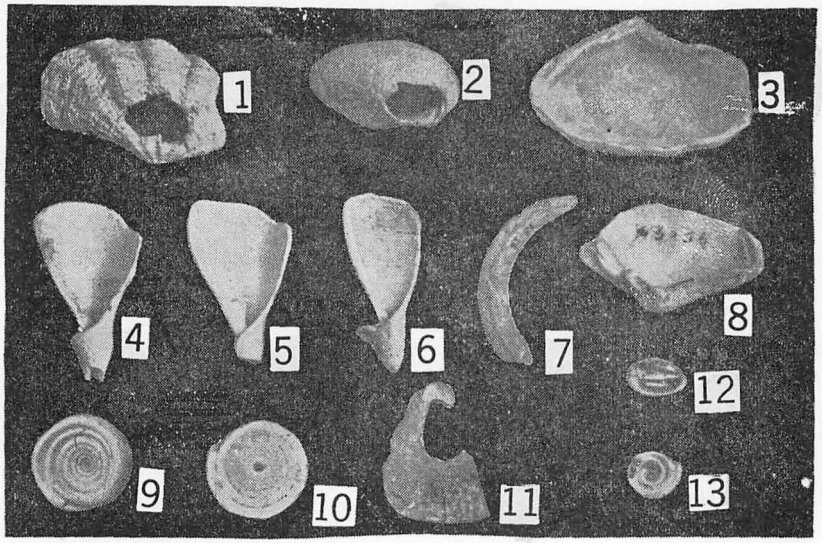
2　調査も終りに近づいた1月2日、神戸療養中の妻が急逝、最後の2日間を琉球大学助教授友寄英一郎氏に指導を担当して頂いた。深く謝意を表したいと思う。

3　なお、今回の調査には下記琉球大学々生の参加があった。
野原盛栄、大城恵子、源河ミツ子、仲里光子、金城美隆、東恩納勝子、松田正博、八幡和子、賀数敏子、山城恵子、新木順子、亀川幸子、仲本兼仁前浜明美、宮城佳子、当真嗣一、安里嗣淳、高安利雄、安次富浩

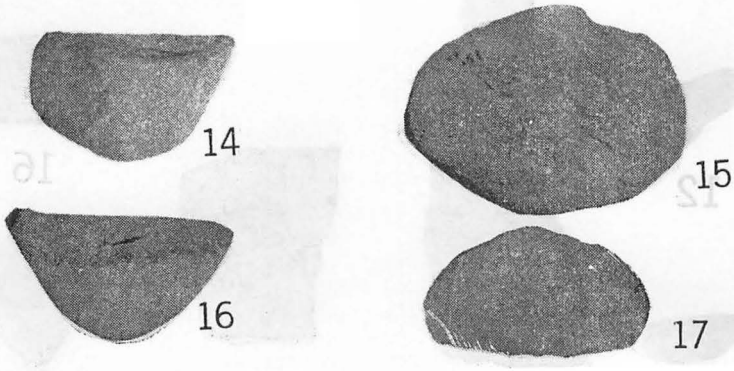
第Ⅰ図版　備瀬貝塚出土々器

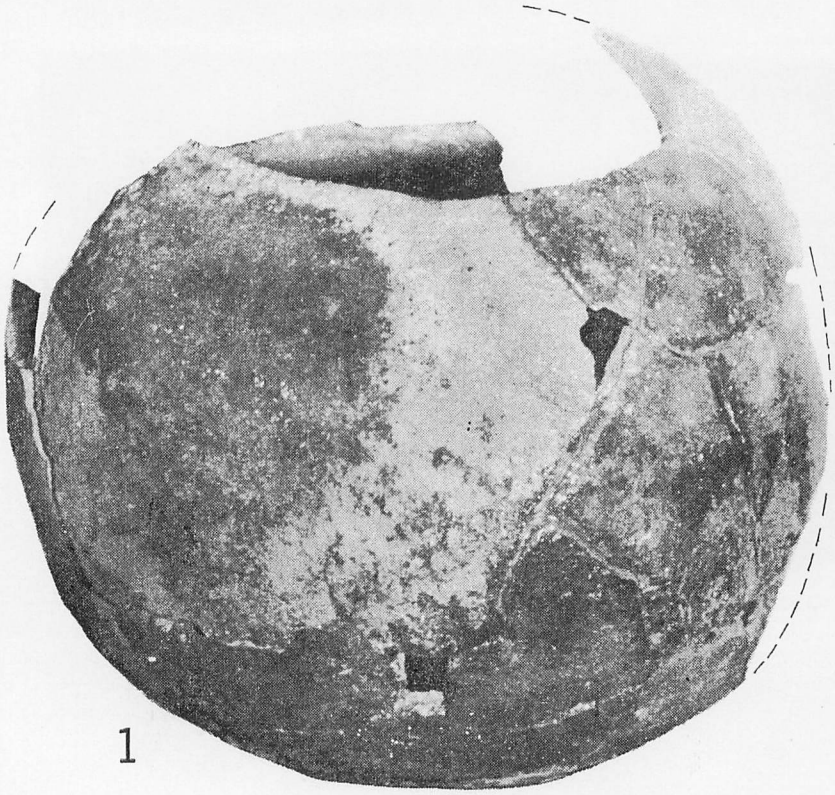


第Ⅱ図版　A．備瀬貝塚採集の貝製品



B．備瀬貝塚採集の石器破片





1

2

3

4

第Ⅲ図版　1. 石川の洞穴、2～4.備瀬貝塚